



## 二 おしっこ王子が学校へ行く

---

今、僕はおしっこ王子と通学中だ。

「学校と一緒に行くのはいいけれど、頼むから黙っていてくれよ」

「いいよ。君の邪魔はしたくないんだ。ちょっと別の世界を見てみたいだけさ」

王子は胸ポケットから顔を出して、周囲を見渡している。

「おっ、いろんな子どもたちがいるんだな。大きな子、小さな子。太った子、やせた子、様々だ。あれ、危ないぞ、あの車。スピードを落とさないと。子どもたちにぶつかるぞ」

「あれは犬か。番犬なのか。大人しく伏せているけれど、こちらに飛び掛かってこないかな。犬は苦手なんだ」

「猫もいるぞ。塀の上を歩いているなあ。僕たちと同じように、猫の学校に行っているのかなあ」

「お母さんたちが黄色い旗を持っているぞ。子どもたちが道路を安全に渡れるように助けているんだな。朝早くから、大変だな」

王子は目にする一つひとつの事柄に一つひとつ反応している。僕にとってはありふれた光景だから、王子が驚くことの方が僕にとっては驚きだ。

「おはよう」同じクラスの幸一君が道路の向こう側で手を上げ、こちらに走ってくる。

「おはよう」僕も手を上げる。でも、このままではまずい。

「友達がやってくるんだ。ちゃんと隠れていてよ。出てきちゃだめだよ」

僕はおしっこ王子に念を押す。

「わかっているさ。君には迷惑はかけないよ」

おしっこ王子は僕の胸ポケットに潜り込んだ。幸一君が僕の側に来た。

「誰かと話をしていた？」

「いいや。誰とも。ひとり言かな？」

僕は首を振って誤魔化す。

「昨日、テレビを観た？」

幸一君がテレビのアニメ番組のことを話しはじめた。

「観た。観たよ」僕はすぐさま相槌を打つ。その話題で夢中になり、王子が胸ポケットにいることはすっかり忘れてしまった。

二人は教室に入り、それぞれの席に着く。ランドセルを下ろし、一時間目の国語の授業の教科書とノート、それに筆箱を出す。

「ずいぶん、盛り上がっていたじゃないか。楽しそうだね」

胸ポケットから声が聞こえた。王子だ。

「しっ」僕は口に指をあて、顎を引いて胸ポケットの中を覗く。

王子は身を乗り出して、教室中を見渡している。

「ダメだよ。隠れていなくちゃ。授業が始まったら、大人しくしてくれよ」

「わかっているよ。君が勉強している教室がどんなものか見てみたいだけだよ。君が勉強するこ

とは、僕も勉強することなんだ。君と僕は一心同体さ」

そう言うと、王子はポケットに再び隠れた。ふう。よかった。だけど、誰かに見つからないかやはり心配だ。

「誰と話をしていたの？」

隣の席の京子ちゃんがこちらを向いた。

「いやあ、忘れ物がないか確認していたんだ」僕は慌てて机の引き出しから教科書やノートを入れたり出したりする。あぶない。あぶない。王子を連れて歩くのは今日だけにしよう。

「起立。礼」授業が始まった。僕の目は黒板と教科書とノートの間を忙しく動き回る。ふと、胸ポケットに目が止まった。王子が顔を出して、僕と同じように、黒板と教科書とノートを交互に眺めている。その様子がなんだか可笑しくて、僕は笑いをこらえることができなかった。

「誰だ。笑ったのは。笑い声が聞こえたぞ。今は授業中だぞ」

黒板に向いていた先生が振り返った。僕は素知らぬ顔で顔を伏せ、教科書を凝視する。体が硬くなった。脇の下から汗が出る。あぶない。あぶない。僕は胸ポケットを睨みつけた。王子は首をすくめるとポケットの中に隠れた。